

## アイヌ民族と北方の交易

8月11日(木) 13:00~14:30 釧路会場

14:40~16:10 釧路会場

講師 中村 和之 函館工業高等専門学校教授

## はじめに

中村でございます。今回の講演では、「アイヌ民族と北方の交易」というテーマを掲げましたが、アイヌ史の研究では、1990年代の半ばあたりから交易ということを非常に重視するようになりました。東北学院大学の榎森進さんなど、アイヌ史研究の中心的な研究者が、交易に注目した論文を書いています。かつて1960年代には、奥山亮さんの『アイヌ衰亡史』(みやま書房、1966年)に「また北東アジアの袋小路にうずくまるといふ地理的条件は、文化の交流を緩慢にし、社会を停滞的にしていた」とありますように、アイヌ社会は閉ざされたものと考えるのが一般的でしたから、ここ30年ほどの間に研究の方向が大きく変わったといえます。

私の研究は、中国史料を利用してアイヌ史を研究しておりますので、主に中国王朝とアイヌ民族との朝貢交易についての史料を読んでおります。したがって、日本史の研究の方たちと同じようなテーマを、北方から検討していることとなります。

## アイヌ民族の沈黙交易

中国の王朝が、アムール川(黒竜江)の下流域に進出したのは、金朝の時代ですが、史料が残っていて当時の状況が明らかになるのは、つぎのモンゴル帝国・元朝の時代です。元代の中期に編さんされた北京の地誌にアイヌと野人との交易についての記述があります。熊夢祥の『析津志』という本です。熊夢祥の生没年は不明ですが、明朝の初めに九十歳余りで亡くなったことがわかっていますので、この本を残したのは14世紀の前半と思われる。析津とは、北京の古い呼び名です。『析津志』に銀鼠の記述があります。

銀鼠〔和林と朔北の者を精と為、山の石の罅の中に産する。初生には赤毛に青っているが、雪に経ると則ち白なる。愈も年を経て深も雪い者は愈に奇とされ、遼東の骨嵬(の)と之が多し。野人が海上の山や藪の中に於いて鋪を設け以て中国之物と易する有が、彼と此とは俱に相に見わぬ。此が風俗なので也。此の鼠の大小や長短は等ではなく、腹の下が微に黄い。……諸の鼠では惟の銀鼠が上と為れ、尾の後の尖上が黒い。〕

骨嵬というのはアイヌのことです。また、野人とは、集団

名ははっきりしませんが、ツングース系に属すると考えられておりますから、満洲人やウイグルと親戚関係にある人たちと考えられます。江戸時代に活躍した山丹人などは、この野人の子孫といえます。銀鼠とは、尾の先が黒いという記述から、イタチ科の毛皮獣であるオコジョのことです。オコジョの冬毛は、英語ではアーミンといわれて珍重されました。レオナルド＝ダ＝ヴィンチの「アーミンを抱く貴婦人」は有名ですし、ダヴィッドが描いた「ナポレオンの戴冠式」では、ナポレオンがアーミンで縁取りしたマントを身にまとっています。

また、往年の大女優オードリー＝ヘップバーンの代表作に、「昼下がりの情事」という作品があります。この映画には、アーミンが重要な小道具として出てきます。ヘップバーン演じる音大生のアリアヌ＝シャヴァックスが、ゲイリー＝クーパー演じる大富豪フランク＝フラナガンのスイートルームに、真っ白な毛皮のコートを身に纏って現れます。そこでひと言。「Siberian ermine, you know? Quite expensive. (シベリアのアーミンよ。知ってる? とっても高いよ。)」実はアリアヌの父親のクロード＝シャヴァックスは私立探偵をしていて、父親の預かり物のコートが無断で着てきたのですが、こんな小娘が持っているはずもない高価なコートを見て、フラナガンはびっくり。きっと大金持ちの恋人がいるのだらうと、私立探偵に身元調査を依頼します。それが彼女の父親だったので、それから話しが複雑になっていく、というラブコメディです。映画自体は有名なので、ご覧になった方も多と思いますが、ヘップバーンが着ていた毛皮を、600年も前にアイヌの人たちが交易していたという話しは、ご存知ないと思います。

さて、『析津志』に話しを戻しましょう。野人と骨嵬とは、海上に小屋を作り、そこに品物を置いていくことで交易をしていました。海上とは、一体なんのことでしょうか。私は、サハリン(樺太)のことだと思っています。この時代の史料では、サハリンは「海島」と表記されます。ここでいう海上とは、海島というのと同じことだと思えます。あるいは、海島の誤りなのかもしれません。ところで、野人と骨嵬とは、お互いに相手に会わないで交易がなされるのですから、これは沈黙交易といわれるものです。沈黙交易については、『日本書紀』斉明天皇6年(660)の条に、有名な記述があります。

三月に、阿倍臣(名を闕く)を遣わし、船師二百艘を率いて、肅慎国を討たしむ。阿倍臣、陸奥の蝦夷を以て、己が船に乗せて、大河の側に到る。是に渡嶋の蝦夷一千余、海の畔に屯聚し、河に向いて営す。

營の中の二人、進みて急に叫びて曰く、「肅慎の船師、多く来りて我等を殺さんとするが故に、願わくば、河を濟りて仕官えまつらんと欲う」と。阿倍臣、船を遣わして、両箇の蝦夷を喚し至らしめて、賊の隠所と其の船数とを問う。両箇の蝦夷、便ち隠所を指して曰く、「船廿余艘なり」と。即ち使を遣して喚す。而るに来ることを肯ぜず。阿倍臣、乃ち綵帛・兵・鉄等を海の畔に積みて、貪め嗜ましむ。肅慎、乃ち船師を陳ね、羽を木に繋けて、挙げて旗と為す。棹を齊え近づき来て、浅き処に停りぬ。一船の裏より二の老翁を出して、廻り行かしめ、積むところの綵帛等の物を熟視せしむ。便ち草衫に換へ著て、各布一端を提げて、船に乗りて還去りぬ。俄くして老翁更た来りて、換衫を脱ぎ置き、并せて提ぐる布を置きて、船に乗りて退りぬ。阿倍臣、数船を遣わして喚さしむ。来ることを肯ぜずして、弊路弁嶋に復る。食頃ありて和を乞う。遂に聴し肯ぜず（弊路弁は、度嶋の別なり）。己が柵に抛りて戦う。時に、能登臣馬身龍、敵の為に殺されぬ。猶、戦いて倦まざる間に、賊破れて己が妻子を殺す。

阿倍臣とは、白村江の戦いでも知られる阿倍比羅夫のことです。比羅夫は、軍勢を率いて北に向かい、大河のほとりで蝦夷から肅慎が攻めてくることを聞かされました。比羅夫は、まず肅慎と接触しようとしたのですが、うまくいきません。そこで、浜辺に絹織物や武器・鉄などを並べました。すると、肅慎の船から二人の老人が来て、置いてあった衣服に着替え、さらに布をひとつずつ持って自分たちの船に戻りました。やがて彼らは戻ってきて、着ていた衣服を脱ぎ、布も返しました。相手の服を身につけること、そして相手からの品物を受け取るということは、お返しにこちらからも品物を提供すること、つまり交易につながります。そして、ものを贈り合うことは、互いの友好の証拠となります。この場合は、理由はわかりませんが、肅慎が交易に応じなかったために、戦いに発展してしまいます。なお、肅慎はかつては「みしはせ」と読まれていましたが、現在では「あしはせ」と読むのが正しいとされているようです。

この『日本書紀』の記述は、世界で二番目に古い沈黙交易の記録とされています。世界で最も古い沈黙交易の記録は、古代ギリシアの歴史家として有名なヘロドトスの書いた『歴史』にあります。

カルタゴ人の話には次のようなこともある。「ヘラクレスの柱」以遠の地に、あるリビア人の住む国があり、カルタゴ人はこの国に着いて積荷をおろすと、これを波打際に並べて船に帰り、狼煙をあげる。土地の住民は煙を見ると海岸へきて、商品の代金として黄金を置き、それから商品の並べてある場所から遠くへさがる。するとカルタゴ人は下船してそれを調べ、黄金の額が商品の価値に釣合ふと見れば、黄金を取って立ち去る。釣合わぬ時には、再び乗船して待機していると、住民が寄ってきて黄金を追加し、カルタゴ人が納得するまでこういうことを続ける。双方とも相手に不正なことは決して行わず、カルタゴ人は黄金の額が商品の価

値に等しくなるまでは、黄金に手を触れず、住民もカルタゴ人が黄金を取るまでは、商品に手をつけない、という。

これは、北アフリカの沿岸で、カルタゴ人とリビア人との間で行っていた沈黙交易です。カルタゴは、地中海交易で有名なフェニキア人の作った植民市で、ローマ帝国と三度に渡るポエニ戦争を戦いました。カルタゴの将軍、ハンニバルのアルプス越えの話は有名です。

このほかには、時代がぐっと下って18世紀の記録ですが、新井白石の『蝦夷志』があります。『蝦夷志』の成立は1720年ですが、ここに、キイタップでの沈黙交易の記述が見えます。キイタップとは、東北海道の霧多布のことです。

東海の諸島は……夷中は総称して「クルミセ」と曰う。

夷人の通ずる所は即ち「キイタップ」なり。嘗て聞く其の互市の例は極めて奇なり。毎歳夷人、船貨を装載して以て行し、岸を去ること里許りにして止まる。島人候望して乃ち其の聚落を去り、之れを山上に避く。夷人其の貨を運搬し海口に陳列して去り、而して止まること初の如し。既にして島人方物を負担し絡繹來会して、各々自ら其の欲する所の物を易取し、其の余及び厥の産を閑置して去る。夷人又た至って之れを収蔵して還る。若し其の方物過多なれば、即ち或は其の余を留め、或は船貨を置きて去る。方物は皆な獣皮なり、船貨は則ち米塩酒煙及び綿布の属なりという。「クルミセ」とは、千島アイヌを意味するのですが、この記述が正しいとすれば、同じアイヌなのになぜ沈黙交易をする必要があったのかという疑問が生じます。もうひとつ、これは江戸時代の伝聞史料ですが、津村涼庵『譚海』巻5の「奥州津軽より松前へ渡り并蝦夷風俗の事」には、

……蝦夷人は刃物を作る事をしらず、又たばこも彼地になし、皆此邦より持渡りて交易する也。交易する所より奥へは此邦の人ゆく事ならぬゆゑ、交易のものを持はこびて、其所にならべ置けば、忽ぞ人來りて彼の方の産物に取かへもてゆく也。昔は斧・まさかり・庖丁・小刀の類、いくらもなまくら物を持行て交易せしが、今は忽ぞ人かしこく成て、刃物をならべ置所へ石を抱き來り、刃物を其石にうちあてて試る、刃こぼれ又はまがりなどすれば、打やりて返りみず、刃よきものをゑりてかふる事に成たり。

という記述が見えます。新井白石の記述は有名ですが、津村涼庵となりますと、近世も終わりのころですから、どこまで信じて良いのか、私には判断が付きません。ただ、アイヌ民族の交易についての記述には、どういうわけか、時代が新しくなっても沈黙交易の記述が現われます。なんらかの理由があるのかもしれませんが、良くわかりません。

なお、『析津志』の交易の方法は、『日本書紀』や『歴史』・『蝦夷志』などとは少し違います。『日本書紀』の場合では、交易する者は、遠くに離れてはいますが、相手を見てはいます。ところが、『析津志』では、お互いに会うことなく交易だけがなされます。その意味では、『析津志』と『日本書紀』とは、沈黙交易ではありませんが、違ったタイプと言わざるをえません。

『析津志』から、アーミンの沈黙交易の事例をご紹介します。皆さんは、少し珍しい話しの紹介程度のことだとお思いでしょうが、実は、この話しが、ユーラシア規模の毛皮交易の証拠となるのです。その話しを、つぎに申しあげます。

### ユーラシア規模でのアーミンの交易

『析津志』が書かれた14世紀前半のユーラシアでは、史上空前のモンゴル帝国が繁栄から衰退へ向かおうとしていました。モンゴル帝国が生み出した巨大な流通ネットワークが、ユーラシア大陸各地の産品を、商品化していたのです。アーミンもそのひとつでした。では、アーミンは一体なにに使われたのでしょうか。

実は、ここにモンゴル人の考えた、実に見事な人心取攬の方法が関係しています。モンゴル人は、当時ユーラシア大陸の大部分を支配していましたが、元々の人口はごく少なかったのです。それで、モンゴル人は、服属した人びとを、どんどんモンゴルに入れてしまいます。モンゴルの旗のもとに集まるものは、みなモンゴルというわけです。我々日本人は元寇でモンゴル帝国に攻められましたから、モンゴルといえば残虐というイメージを持ちがちですが、実際は違うようです。京都大学の杉山正明さんなどが進めている最近のモンゴル史研究は、これまでとは全く違うモンゴル帝国像を作りだしています。モンゴル軍が敵を何十万人も殺したとかいう話は、実は少数のモンゴル軍が敵に勝つために、意図的に流したデマだというのです。実際に、モンゴルの戦争では、勝敗が見えてくると、負けた方はさっさと逃げてしまいますので、凄惨な殺戮というのはあまりなかったといわれています。

このように、モンゴルという集団が大きくなると、いろいろな言葉の人間が組み入れられていきます。そうすると、どうしても彼らの一体感を高めなければなりません。そういうときには、やはりお酒を飲んで楽しくやるのが一番なのです。モンゴル帝国では、1年に13回も「只孫の宴」という宴会を開きますが、その時には全員が同じ色の衣装を着るのです。ジスンとは、モンゴル語で色を意味します。このようにして、全員がモンゴルというひとつの集団に属しているという認識を、視覚的にも定着させるのです。このように、モンゴル帝国では重要な儀式がありますと、しばしば衣服の色を揃えることが行われました。1247年に、モンゴル帝国に派遣されたポーランド人ベネディクト修道士の口述には、

この同じポーランド人ベネディクト修道士がわたしどもに口ずから語ってくれたのによると、修道士たちは、5000人ほどの諸侯と要人たちとを見たのですが、これらの人々は、かれらがその王の選任に集まった一日目には、ひとり残らず、黄金色の衣服を着ていました。しかし、その当日にも、またそのあくる日—この日には人々は白い金糸混織絹布の衣服をまといました—にも、意見の一致を見ませんでした。しかし三日目—この日には人々は赤い金糸混織絹布を着ました—に、相談がまとまって、選任が行われました。

とあります。

1年に13回開かれる宴会のなかで、モンゴル人が一番大

切にしたのは、彼らの正月に開いた「白い宴」です。あの有名なマルコポーロの『東方見聞録』第3章「カーンが挙行する元旦節の盛大な祝典」に、つぎのような記述があります。

タルタル人の新年は、われわれの太陽暦では二月に当たる。カーン及び百官衆庶しゅうしよがこれを祝う模様を次に述べよう。

元旦には、カーンより以下その国人のすべてが、余裕のない者は別として、老幼男女を問わず白い衣装をつけるのが習慣となっている。それというのも、白い衣装は佳良なるもの、吉兆のものと思なされているからである。その一年間が彼らにとって幸福であり幸運に恵まれるようにとの思いから、新年には彼らは白い衣装をつけるのである。元日にはカーンに臣属するあらゆる人々、また各地方、各王国から金銀・真珠・宝石そのほかすこぶるりっぱな白布しやうふの類がカーンへの莫大な贈り物として献上される。つまりこれは、この一年間を通じて彼らの主君たるカーンが財宝を豊富に持ち、機嫌うるわしくかつ幸福であり続けるようにとして行われるものなのである。更にまたこの日には、重臣・武将そのほかあらゆる人々の間でも、白色の品を贈与

し合い、互いに抱き合って挨拶を交し喜び睦み合う。ここでタルタル人というのは、モンゴル人のことです。正月の白い宴では、身分の低い者たちは布を着たのですが、身分の高い者たちは白い毛皮を着ました。大ハーンであるフビライ＝ハーンが身にまとったのは、純白の毛皮、つまりアーミンでした。モンゴル帝国の宮廷画家である劉貫道りゅうくわんどうが描いたとされる「元世祖出獵図」には、アーミンのコートを着たフビライ＝ハーンが描かれています。純白の毛皮に、オコジョの特徴である黒い尾の先がきちんと描き込まれています。

13回の宴に出席できるというのは、モンゴル帝国の王侯貴族の特権でしたから、彼らには、皇帝から衣服が下賜されました。『元史』巻9、世祖本紀6、至元13年(1276)

12月庚寅には、

阿朮等の戦功を賞し、及び降臣の呉堅・夏貴等に賜った銀・鈔・幣・帛には各に差が有る。伯顔・阿朮等に賜った青鼠・銀鼠・黄鼬の只孫の衣、餘の功臣に賜った豹の裘、獐の裘、及び皮の衣と帽には各に差が有る。

とあり、手柄を立てた家臣に「青鼠・銀鼠・黄鼬の只孫の衣」が与えられています。これを着て「只孫の宴」に参加するわけです。もちろん、宴会に参加できる者すべてに、銀鼠つまりアーミンの衣装が与えられたわけではないですが、それにしても大量のアーミンの毛皮が必要とされたはずで、これに対応するため、ユーラシア大陸の各地でアーミンの毛皮の生産が行われました。アジア・アフリカ・ヨーロッパの三大陸を旅した、14世紀の大旅行家であるイブン＝バットゥータの『大旅行記』には、北欧のパレンツ海沿岸で行われるアーミンの沈黙交易についての記述があります。

旅行者たちはこうした水なき広漠な土地をたっぷり40日行程を費やして踏破すると、暗黒のところを降りる。そして彼らは各自で持ってきた商品をそこに置き去りにして、彼らのいつもの定め

返す。翌日になって、彼らの商品を調べに戻ると、その商品の前に貂<sup>てん</sup>、灰色栗鼠<sup>りす</sup>とアーミン [の皮革など] が置いてあるのを見つける。その商品の持主が自分の商品の前にあるものに満足すれば、そこに置かれたものを取る。もしそれに満足しなければ、そのままそれを放置する。するとそこの人々、つまり暗黒 [の土地] の住民はその毛皮類を増しておくこともあるが、時には彼らの [毛皮類の] 品物を引き上げてしまい、商人たちの商品をそのまま残す場合もある。……なお、アーミンこそは毛皮類のなかでも最良のもので、インド地方ではその毛皮 [の外套] が 1000 ディーナールにもなる。それをわれわれの金貨に換算すると 250 [ディナール] になる。それは小型動物の皮革であり、純白色で、その長さは一シプル、その尻尾は長いので、人はそのままの状態<sup>しらぬし</sup>で毛皮にする。貂は、それと比べると価値は劣るが、それで作った毛皮の外套は 400 ディーナール前後である。こうした毛皮類の特殊な性質の一つとして、それには虱<sup>しらみ</sup>が付かないので、シナのアミールたちやその高位高官たちは、その一枚皮を彼らの毛皮の外套<sup>えり</sup>の襟の部分に付けている。同じように、ファールスや両イラクの商人たちも使っている。このようにして集められた、アーミンの毛皮は、商人の手でカンバリックとも呼ばれた元朝の首都・大都 (現在の北京) に運ばれていったのです。イタリアの商人ペゴロッチが残した『商業指南』は、この時期の東西交易に関する貴重な史料です。モンゴル帝国で商売をするには、どのようなことに注意すべきかが書かれています。この本には、つぎのようにあります。

リスの毛皮は千枚で売る。千二十枚が千枚分となる。

アーミンは千枚で。千枚は千枚。

狐、黒テン、においねこ、テン、狼皮、鹿皮、そして絹または金の着物、一枚ずつ。

ふつうの布やすべての種類<sup>しらぬし</sup>の麻布はピッコを単位に売られる。

当時の商業習慣では、アーミンは千枚を一組として取引が行われたようです。リスの毛皮も千枚が一組ですが、おもしろいことに、リスの毛皮は千二十枚で千枚と見なされました。どうしてこんな習慣が成立したのか、不思議ですね。

このように、アーミンの需要が増大し、遠距離での流通が行われるようになると、サハリンのアイヌの人たちは、好むと好まざるとにかかわらず、毛皮の生産・流通ネットワークに組み込まれていくことになります。

では、なぜ沈黙交易などという手間のかかる方法を取るのでしょうか。実は、モンゴル帝国・元朝とアイヌは、約 40 年にもわたって断続的に紛争を繰り返して来ました。元軍は、北上してくるアイヌを見張り、撃退するために、サハリンの最南端のクリリオン岬に「自主土城」を築きました。このように言いますと、アイヌの人たちが、あのモンゴル帝国を相手に大戦争を繰り返したと考える方もおられるかもしれません。しかし、私はそんなに規模の大きいものではないと思っています。私は、交易に絡むニヴフとアイヌとの争いに、元朝が介入したのが戦いの原因だと考えています。ニヴフが生産する毛皮や鷹の羽根などは、元朝への貢ぎ物として差し出されます。しかしそれらは、アイヌが欲しいものでもあったのです。アイヌの人たちは、

サハリンで毛皮や鷹の羽根を手に入れると、それを南に運びました。交易をくり返して東北地方にまで運ばれますと、そこには、津軽半島の十三湊<sup>としまなと</sup>に根拠を置く、安藤氏という海の豪族が活発な交易を展開していました。アイヌの交易圏は、安藤氏の交易圏と接していたのです。簡単にいいますと、アイヌの南には安藤氏が、ニヴフの北には元朝がいたこととなります。

以上のように、元朝の進出によって、アイヌとニヴフとの交易上の矛盾が激化しました。それがアイヌと元朝との紛争に結びつき、約 40 年も続いていたのです。そのため、野人が沈黙交易を行うという形を取って、アイヌと元朝の間の緩衝材の役目を果たすことで交易が維持されました。野人の仲立ちで、アイヌの生産したアーミンの毛皮と、元朝が下賜する中国製品とが交易されたのです。アーミンのほかには、鷹なども交易品であったと思われます。海東青と呼ばれるサハリンの鷹は、元朝・明朝の時代を通じてブランドとして有名でした。

### アーミンから黒テンへ

では、東北アジアの毛皮の交易はアーミンだけなのでしょうか。実は、そんなことはありません。なんとといっても、黒テンは無視できません。モンゴルの『古事記』といわれる『モンゴル秘史』巻 2 に、つぎのような話があります。一度没落したテムジン、後のチンギス＝ハーンが次第に力をつけてきたので、敵のメルキト部族が突然攻めてきました。彼は命からがら逃げるのですけれども、新妻のブルテが敵にとらえられてしまいます。それで、テムジンは、お父さんの義兄弟だったオン＝カンのところに行き、オン＝カンから軍勢を借りて妻を取り戻そうとします。

オン＝カンのもとに、テムジンはたどりついて申すよう、「昔 [あなたは] わが父とアング [の誓い] を言い交されましたね。 [それで、亡き] 父も同然 [のお方] だと思ひまして、妻に取り降ろさせて、引出物の衣裳をあなた様に持って上がりました」とて、黒貂の皮衣をやった。オン＝カンはいたく喜んで申すよう、

「黒貂<sup>カラ・ブルガン</sup>の皮衣の返礼に、離れ離れになりたる汝がウルス国民<sup>ブルガン</sup>をば、集めてやらん。貂<sup>黒</sup>の皮衣の返礼に、散り散りになりたる汝が国民をば、纏め合わせてやらん。腎臓は腰に、秘密は胸にあれ。」

このように、テムジンは、軍勢を借りる時に、黒テンのコートを土産として差し出しています。黒テンは、それほど高価なものだったのです。

明朝の後半期から、黒テンの需要が高まり、アムール川の中下流域で黒テンの毛皮の生産が行われます。やがて清朝が成立しますと、貢物は全て黒テンの皮に統一されます。間宮林蔵の記すとおりです。そうしますと、アイヌの人たちは、次第にアーミンの毛皮を生産しなくなります。最上徳内『蝦夷草紙』上巻には、

銀鼠 東蝦夷に諸所にあり。いたちより少し小なるものにて、潔白なり。稀<sup>に</sup>赤もあり。

とありますが、特に毛皮についての記載はありません。このように、アイヌの毛皮生産は、中国という巨大な毛皮消

費地の動向と密接に結びついていたのです。中国でアーミンの需要が高まると、アーミンの毛皮を生産し、黒テンの需要が高まると、そちらにシフトしていくということが起ったのでした。ここでは特に触れませんが、ラッコの毛皮についても同じことがいえると思います。

### 元朝・明朝のアムール川下流域・サハリンへの進出

元朝は、アムール川の下流域のティルに、東征元帥府という役所を置きました。元朝がアイヌと争いを起こしていたことは、すでに申しあげましたが、その最前線が、先ほど申しあげた自主土城です。私は、この自主土城が、元朝が築いた前進拠点の果敢だと考えています。2001年から、中央大学の前川要さんとサハリン国立大学のアレクサンドル＝ワシレフスキーさんがここを発掘しておりますが、三方に約100の土塁とその外側に堀を巡らせた規模の大きいものです。前川さんが、この土塁を断ち割って調べましたところ、版築という構造を持つことがわかりました。版築は、万里の長城などに使われている中国の工法です。従って、この遺跡は大陸からの技術で造られたことがわかっています。

13～14世紀の元朝の時代が終わり、明の永楽帝が積極的に外交政策を繰り上げた15世紀の初頭には、アムール川の下流域にも、明の勢力が及びました。明の永楽帝は、女真人の亦失哈という宦官を派遣しました。鄭和というイスラム教徒の宦官が南海遠征をしていたのと、ちょうど同じころです。亦失哈は、東征元帥府が置かれていたティルに、新たに奴兒干都司という役所を置きました。その役所に附属して、永寧寺というお寺を置き、その経緯を記した石碑も立てました。ひとつが1413年の「勅修奴兒干永寧寺記」、もうひとつが1433年の「重建永寧寺記」です。1809年、ティルに二つの石碑が建っていたことを、間宮林蔵が目撃して記録に残しています。この二つの石碑は、19世紀にロシア極東のウラジオストークに移されました。現在は、ウラジオストークの沿海地方国立アルセーニエフ総合博物館に収蔵されています。「勅修奴兒干永寧寺記」には、

惟だ東北の奴兒干国は、……其の民は吉列迷及び諸種の野人といひ、焉に雑居している。皆（中華の）風を聞き化を慕っているが、未だ自で至ることが能ない。況其の地は五穀が生ず、布帛を産せず、畜養のは惟だ狗だけである。或は野人が口を養い、口を運び諸な物を用っている。或は魚を捕える以を業と爲て、肉を食べ而に皮を衣ており、弓矢を好む。諸般の衣食之艱は、言に爲ことが勝不ほどである。……（1411）永楽九年春、特に内官の亦失哈等を遣し、官軍一千余人を率い、巨船二十五艘で、復た其の国に至り、奴兒干都司を開設した。……十年冬、天子は復た内官の亦失哈に命じて其の国に載せらせた。海西自り奴兒干に抵り、海の外の苦夷の諸民に及ぶまで、男婦に賜うに衣服・器用を以てし、給えるに穀米を以てし、宴すに酒饌を以てしたところ、皆踊躍て

懼忻び、一人も硬化して率わ不者は無かった。上は復た金銀等の物を以て地を擇んで寺を建て爲せ、斯の民を柔化し、……十一年秋、奴兒干の西に、満溼という站が有のをとんだ。站之左は、山が高く而に秀麗であつた。是より先、己に観音堂が其の上に建てられていたが、今寺を造り佛を塑つたところ、形勢は優雅で、燦然として観る可ものがあつた。国之老も幼も、遠きも近きも濟々争つて……

とあり、明朝が苦夷と朝貢関係を持ったことがわかります。漢字は違いますが、苦夷とは骨鬼と同じく、アイヌを意味します。元朝とは違い、明朝とアイヌとの関係はどちらかといえば平和的な関係であったようです。明朝が与えたさまざまな品物のなかには、高価な絹の衣服もあつたでしょう。それらの品物は、アイヌ社会のなかでも消費されたでしょうが、津軽安藤氏など東北地方の豪族たちのものにも交易されていきました。

### 明朝の後退とコシャマインの戦い

明の永楽帝が死に、孫の宣徳帝が1435年に世を去ると、明朝の勢力はアムール川流域から後退し始めました。1449年には「土木の変」が起きて、明の正統帝がオイラトのエセン＝ハンの捕虜にされてしまいます。こうなると、もう万里の長城より北の地域には、明の勢力は届かなくなります。その辺の事情について、『明実録』景泰4年（1453）正月壬午の条には、

弗提等の衛の都督の常安奴と大小の頭目等に勅した。正統十四年に尔等は北虜が我が遼東の辺境を犯したのに誘引されて、人口を掠去つた。景泰元年にも尔等は又開原等の処の辺境に来て、山東一帶から遼陽等の処に直抵るまでの男婦を虜えて去つた。尔等の罪を論じれば、本より容恕すことは難しい。但し朝廷は天地の量を弘して、置て不問とし、已に勅を降して尔等の罪を赦免することとした。

とあり、アムール川をかなり遡ったところにある弗提衛ですら、明朝の支配から離脱し始めていることがわかります。

明朝の後退は、東北アジアにどのような影響を及ぼしたのでしょうか。東アジアの巨大帝国である明の勢力が後退することが、サハリンや北海道にも影響を及ぼさなかったはずはありません。しかし、はっきりと影響が及んだという記録もないのです。唯一、私が注目しておりますのは、コシャマインの戦いについてのつぎのような記述です。松前藩の公式の記録である『新羅之記録』上巻には、コシャマインの戦いの原因が、つぎのように記されています。

中此内海の宇須岸夷賊に攻め破られし事、志濃里の鍛冶屋村に家数百有り、康正二年春乙孩来て鍛冶に剛刀を打たしめし処、乙孩と剛刀の善悪を論じて、鍛冶剛刀を取り乙孩を突き殺す。之に依て夷狄悉く蜂起して、康正二年夏より大永五年春に迫るまで、東西数十日程の中に住する所の村々里々を破り、者某を殺す

事、元は志濃里の鍛冶屋村に起るなり。生き残りし人皆松前と天河とに集住す。

マキリというのですから、小刀でしょうか。アイヌの若者が、鍛冶屋と小刀の値段をめぐって争いになり、ついに鍛冶屋がアイヌの若者を殺してしまった、これがコシャマインの戦いの発端だということです。これは、大変に示唆的な話です。鉄器の交易が、あの大きな戦いの発端だったということです。明朝の勢力が縮小し、朝貢交易が停滞すると、アイヌは経済的な優位を失っていきます。それは、和人との交易でいえば、和人の提供する品物が高く感じられるということになります。かつては、北からの交易品と交換すれば、鉄製品などいくらでも手に入れることができました。しかし、同じ鉄製品を、自分たちの生産した乾サケだけで手に入れようとすれば、沢山の乾サケが必要です。どうしてもこんなに高いのだろうと不満を持つアイヌが出てきても、不思議はありません。それが、コシャマインの戦いにまで発展してしまったのではないのでしょうか。

おわりに

交易を切り口にアイヌ民族の歴史を考えてみると、今までの歴史像とは違った歴史を描くことができます。北方の

先住民族の社会は、平和であり変化がないように思われますが、13～15世紀には東北アジアがダイナミックに動いていて、アイヌ民族もそれに巻き込まれる形で、変化に富む時代を経験していたということになります。

最近、筑波大学の木村和男さんが、『カヌーとビーヴァーの帝国—カナダの毛皮交易』（山川出版社、2002年）と『毛皮交易が創る世界—ハドソン湾からユーラシアへ』（岩波書店、2004年）という大変おもしろい本を書きました。木村さんは、世界の商業ネットワークを成立させた世界商品としては、これまで紅茶・コーヒー・砂糖・綿花・タバコなどの熱帯・亜熱帯産の品物が重視され、毛皮は、例外として重要さが見過ごされてきたことを指摘しています。そして、毛皮交易を中心とした「北回りの世界史」の必要性を強調しています。私が今日お話したことも、「北回りの世界史」のなかの小さなエピソードを紹介したことになりますが、これ以上のお話しは、どうも私の能力を超えております。今日のお話しは、これで閉じさせていただきます。ご静聴、有難うございました。

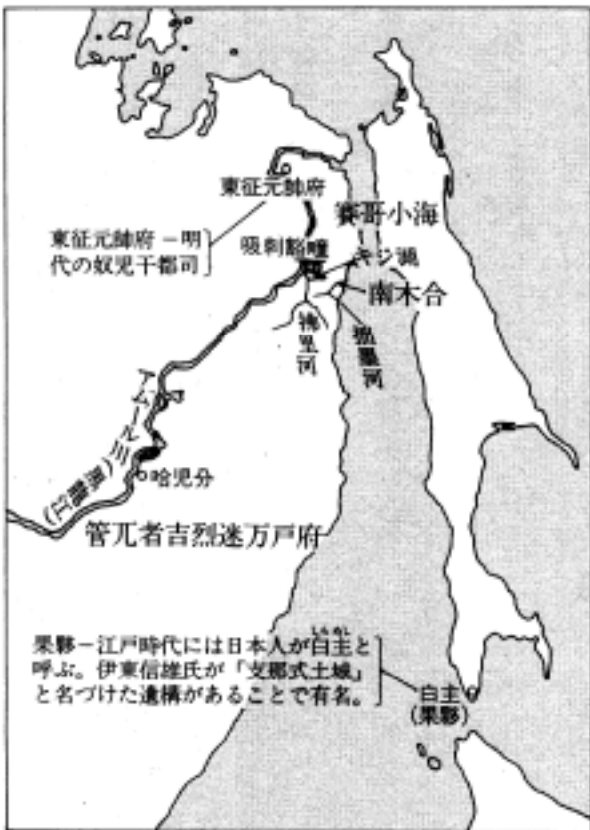


図1 元・明代のアムール川下流域・サハリン



図2 勅修奴児干永寧寺碑（2004年8月2日、沿海地方国立アルセーニエフ総合博物館で筆者撮影）



図3 重建永寧寺碑、石碑の側に立つのは北海道大学の菊池俊彦教授（2004年8月2日、沿海地方国立アルセーニエフ総合博物館・国際展示館前庭で筆者撮影）



図4 アムール川の船上から望むティルの丘（2005年8月27日、筆者撮影）



図5 永寧寺跡から出土した遺物（2005年8月28日、ニコラエフスク・ナ・アムーレ市立博物館で筆者撮影）



図6 永寧寺跡から出土した瓦（2005年8月28日、ニコラエフスク・ナ・アムーレ市立博物館で筆者撮影）

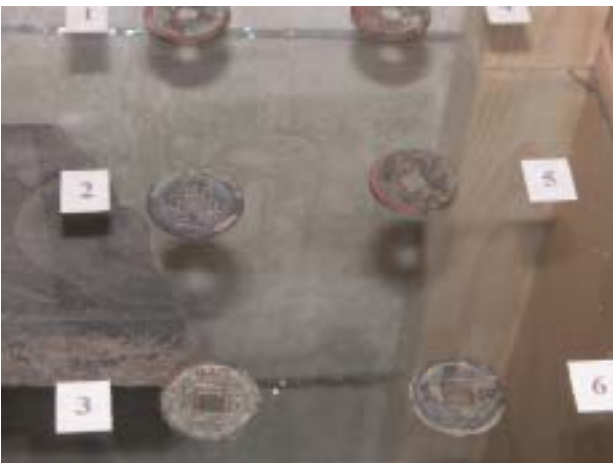


図7 永寧寺跡から出土した中国銭（2005年8月28日、ニコラエフスク・ナ・アムーレ市立博物館で筆者撮影）